きつねと博労（ばくろう）　山形

むかし、馬を買ったり売ったりすることを仕事にしている人を、博労といいました。このお話は、博労ときつねのお話です。

むがし、むがし

むがしあったどな。ある村で、きつねがたくさん出てきて、いたずらをして、村の人たちはみなこまっていました。お祭りのごちそうなんか、包（つつ）みごとぺろっと盗（と）られてしまいました。

なかでも、かしこいので有名なきつねが三匹いました。やろごろぎつねと、お夏ぎつねと、ねんねこぎつねです。けっして人につかまらないりこうなきつねでした。

ある日のこと、ひとりの博労が、仕事が終わって帰ってくると、道ばたの草むらで、なんだかごそごそと相談している声がしました。そっとのぞくと、やろごろぎつねと、お夏ぎつねと、ねんねこぎつねでした。博労は、急いで馬を止めて、聞き耳をたてました。

「なあ、そろそろ雪が降（ふ）るというのに、今年は何ひとつ人間をだまして盗（ぬす）んでいない。このごろは人間もかしこくなって、弁当（べんとう）ひとつ盗（と）れない。このぶんでは冬も越（こ）せないぞ。こまったもんだ」と、ねんねこぎつねがいうと、お夏ぎつねが、

「人間から、魚とか取るんなら、おれに考えがある。やってみようよ」といいました。

「考えって、なんだ」

「あんたたちのどちらかがりっぱな馬に化（ば）けて、おれが博労に化けて、金持ちのうちへ売りに行くんだ。うんと高く売ってみせるよ」と、お夏ぎつねがいうと、やろごろぎつねが、

「ほんなら、おれが馬に化けよう」といいました。

博労は、それをすっかり聞いてしまいました。

つぎの日の夜明け前、博労は野原に出かけて行きました。そして、

「やろごろ、起きてるか。早くしないと人が来るよ」といいました。やろごろぎつねは、

「めっぽう早いなあ。どれ、ひとつ化けるか」といって、ぱっと飛びあがって、りっぱな馬に化けました。博労は、

「そうだな、足が少し短いぞ、もっと長くしろ。背中のばしてしゃんとしろ」と、注文をつけました。やろごろの馬はますますりっぱになって、博労に引かれていきました。

町の金持ちの家に着くと、番頭さんが、

「これはこれは、近年にないりっぱな馬ですな。売りに来たんかね」といいました。

「そうですよ」

「なんぼで売るんだ」

「そうですな、こんなにりっぱな馬だもの、千両や二千両では売れません。千両箱の三つももらわないと」と、博労がいうと、主人が出てきて、

「たしかに、こんなにりっぱな馬だもの。三千両で買おう」といいました。

馬は、厩に引いて行かれながら、こっそり博労にいいました。

「お夏、お夏。おれ、三日のうちにかならず逃げていくから。あぶらげ飯をどっさり作って待っていてくれ。馬のエサばかりではとてももたない」

博労は、

「よしよし。あぶらげ飯を腹いっぱいになるほど作っておくぞ」といって、帰って行きました。

博労は、三千両を手にいれて、楽々と暮らしたということです。

とんびすかんこ　ねっけど

村上郁再話

資料『雀の仇討』野村純一・敬子